

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(みちびき・はぐくみ)

「マツヤマお城下リレーマラソン2017」事業

チームでタスキをつなぎゴールを目指すことで 絆や交流の基盤づくりと子どもの健全育成に貢献

親子の絆を深め、地域での異年齢・異世代の交流の創出を目指して、2014年にスタートした松山市のリレーマラソン大会。第4回目となった2017年の大会は、あいにくの台風で2日目が中止となったが、雨天という悪コンディションにもかかわらず、熱いレースが展開された。



雨中のコンディションのなかでも多くの参加者がタスキを繋いだ



リレーマラソンを告知するポスター

公園内周回コース42.195kmをタスキでつなぐ リレー形式のマラソン大会に2,200人が参加

近年、共働き家庭の増加や核家族化により家族間・世代間でのコミュニケーションが低下しているといわれるなか、子どもたちを巻き込んで何かの活動をするという機会が、家庭や地域から失われつつある。それと同時に、地域に暮らす人々の「絆」も以前に比べて弱くなったと指摘もされている。

地域をまき込んだスポーツには、健康増進のみならず、地域活性化の基盤であるコミュニティの絆を強め、さらに次代を担う子どもたちの健全育成という機能もある。松山市体育協会、松山市陸上競技協会、愛媛新聞社の3団体で構成される「マツヤマお城下リレーマラソン実行委員会」では、スポーツの持つそうした機能に着目し、特殊な

道具を必要としないランニングと、チームで一つの目標を目指すリレーを組み合わせた「マツヤマお城下リレーマラソン」を2014年から実施している。

これは、松山市の城山公園内周回コース(1周1,520m)をマラソンと同じ42.195km走る大会で、独力で最低1周を完走できる小学4年生以上の男女が参加でき(部門によって編成人数は異なる)、タスキリレー方式でゴールを目指すというもの。第4回目となった昨年(10月21・22日)は、8部門(一般・女子・マスターズ・小学生・職場対抗・ファミリー・ふるさと対抗・エンジョイランニング)に688チーム・6,007名のランナーがエントリーしていたが、台風のために2日目の競技が中止となり、4部門(一般・女子・マスターズ・小学生)に252チーム・2,200人のランナーが参加して実施された。

台風接近という悪コンディションの中で 新しい取り組みも含めて熱戦が展開

大会初日の10月21日は台風接近に伴い、朝から雨模様。時折強風を伴う激しい雨が降り続く悪コンディションの中、スタートの号砲が鳴らされた。ランナーも応援者もレインコートを着込んでの疾走、応援となったほか、運営側も全員濡れネズミの状態、200名を超える審判員、補助員、スタッフや協賛社の人々もビショビショのままで奮闘。スペシャルサポーターとして参加したスポーツキャスターの青木愛さんも過酷な現場にもかかわらず、最後までランナーの激励を続けた。

大会の様子は『愛媛新聞』の通常報道に加え、別刷り12ページ特集報道として掲載されたほか、愛媛CATVで5時間にわたって生放送された。「翌日の新聞記事での『むしろ雨でチームの絆がさらに強まった』といった参加者の

コメントに心をうたれました」と、実行委員会のメンバーの一人は話す。

また、今回は年齢制限で参加できない小学3年生以下の子どもたちを対象に、アディダスランニングアドバイザーの湯田友美さんを招いて「かけっこ教室」を実施。ステージ上にテントを設置し、その中で走ることに関する基本的な意識、フォーム、手と足の使い方などについての具体的なアドバイスがあり、また、実際に体を動かしながら体験した。参加した子どもからは、「教わった走り方を運動会でも試してみたい。大きくなったらリレーマラソンにも出てみたい」といった意見が寄せられた。この「かけっこ教室」の実施・運営にAJOSCの助成が活用された。5回目となる2018年度も10月に開催予定で、「総エントリー数700チームを目指したい」と、実行委員会メンバーは意気込みを語った。



元陸上選手の湯田友美さんを招いて行われたかけっこ教室



子どもたちは真剣な表情で指導を受けた

助成団体: マツヤマお城下リレーマラソン実行委員会



より多くの方が参加しやすく、参加してよかったと思われる大会に!

4回目となった大会ですが、雨天での実施も悪天候による一部中止も、いずれも初めてのことでした。助成により、素晴らしい講師による「かけっこ教室」が実現できました。今回参加いただいた小学生、また参加できなくても興味を持ってくれた小学生たちに、ゆくゆくはリレーマラソンや他のランニングイベントに参加してもらえたら幸いです。

マツヤマお城下リレーマラソン実行委員会
愛媛新聞社 東京支社 営業部 木村祐貴さん